

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-15

【図書紹介】『自然と人間—哲学からのアプローチ』大東俊一、奥田和夫、菅沢龍文、大貫義久編 梓出版社 二〇〇六年

鈴木, 裕輔 / Suzumura, Yusuke

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

81

(終了ページ / End Page)

81

(発行年 / Year)

2008-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007948>

【図書紹介】

『自然と人間——哲学からのアプローチ』

大東俊一、奥田和夫、菅沢龍文、大貫義久編 梓出版社 二〇〇六年

鈴木 裕輔

「キーボードをたたけば文字が出る」というように行爲と結果に対応がある場合、その対応の背後にある原理を知ろうとする人は少ない。なぜなら、原理を知らなくとも期待する「答え」を得られるからだ。だが、行爲と結果の間に対応のない、いわば未知の問題に遭遇するとき、問われているのは事象の根本に存する原理が何であるかだ。身近な例でいえば、温暖化や異常気象といった気候変動に象徴される環境問題は、二十一世紀の人類にとって不可避なだけでなく、自ら「答え」を生み出さなければならぬ課題のひとつである。本書は、そのような答えのない問題としての環境問題を考察する際の糸口を提供する。

「古代ギリシア」「ルネサンスから近代」「近代」「現代」「日本」の五部に分かれた本書では、主として西洋哲学の歴史を彩った哲学者たちを中心に論が進められる。具体的には、ソクラテス、プラトン、アリストテレスからデカルト、ホッブス、カント、ヘーゲルらを経て実証主義者や現象学者へと続く太い流れが対象となっている。

自然と人間とのかかわりをみるのに古代ギリシアのミレトス派とヘラクレイトスから筆を起す本書の姿勢は、迂遠なも

のと映るかもしれない。しかし、事物を合理的、体系的に説明しようとした古代ギリシア人の思考様式の末裔が西ヨーロッパで誕生した近代科学であることを考えれば、この態度が重要なことはすぐにわかる。つまり、過去を知ることが未来への指針になるのであり、近代科学の負の副産物として生じた環境問題の根源を探る上で西洋哲学の流れに従いながら「自然と人間」への問いの展開を確認することが、得てして技術革新によって問題の解決が図られる環境問題に新たな視角を提供することになるのである。

残念ながら、本書には、北極圏の氷の溶解を食い止める方法は書かれていない。だが、古代ギリシア哲学から日本の伝統的な自然に対する見方までを考察することで、自然と人間の持続可能な共存のあり方がいかなるものであるかを考える際に重要な手がかりを与えてくれる。網羅性のゆえではなく自然と人間のかかわりの多様性のために生まれたのが本書の含む幅広い論点であり、技術ならざる人間の存在の課題としての「自然と人間」の問題を考える上でも、示唆に富む一冊だ。